我国最初の総合体育館・東京 YMCA 旧体育館に関する史的考察

社会用体育館に関する建築計画史的研究 その2

TOKYO YMCA OLD GYMNASIUM AS THE FIRST COMPOSITE GYMNASIUM
IN JAPAN

上和田 茂*

Shigeru KAMIWADA

Characteristic of Tokyo YMCA old gymnasium were analysed on following five aspects.

1. Wide sports room, indoor swimming pool, running track, and bowling-alley were set up first in Japan.
2. It is regard as the pioneer of multistory gym.in urban district in Japan. that's composition under simple structure is compact. Dividing between traffic line of player and it of spectator is clear.
3. It is regard as the pioneer of sports club for citizen. They could individually enjoy various indoor sports as member.
4. It was designed on the model of YMCA gym.in USA. For example Dayton YMCA in Ohio state.
5. It contributed to physical education world. The spread of modern sports, making rule of using pool and swimming competition, the spread of new swimming method, and training of social sports leader.

Keywords : YMCA building, composite gymnasium, multistory gymnasium, indoor swimming pool,

Kuninosuke YAMAMOTO, W.M.VORIES

YMCA会館, 総合体育館, 積層型体育館, 屋内温水プール, 山本邦之助, W. M. ヴォーリス

1. はじめに

前報¹⁾では、戦前における社会用体育館の発展に多大な貢献をなした日本各地のYMCA体育室を対象に、その発展過程と時代的背景を明らかにした。本報では、その過程において体育館の形態の画期的な発展に寄与した東京YMCA旧体育館について史的考察を行う。

大正6年(1917年)10月、東京神田美土代町に開設された東京YMCA旧体育館は、近代的設備を備え、広く市民に開放し、諸種の体育事業をなした社会用の総合体育館としては、我国最初のものであり²⁾、次のようないくつかの興味深い特徴を有するものであった。

第1に、それまでの日本のYMCA会館内の体育施設が集会施設との兼用か、専用であっても極めて粗末なものであった³⁾のに対して、アリーナと屋内プールを中核として充実した施設内容をもつ本格的な体育専用施設として登場したこと。第2に、当時の北米YMCAの中でも先進的な体育館をモデルとして計画されたものであったこと。第3に、この体育館以後の日本各地の都市YM

CAの体育館が、バスケットボールをはじめとする球技施設あるいはその競技観覧施設としての機能を強めていったのとは異なり、近年の公共体育館が次第にそうなりつつあるように、球技はもとより総合的なスポーツ・レクリエーションの場としての機能をもつ先駆的な存在であったこと。このような画期的な存在であった東京YMCA旧体育館は、大正12年(1923年)9月の関東大震災により、その骨格を残して焼け落ち、昭和2年(1927年)7月の再建後、再び使用に供されていたが、昭和38年(1963年)の新体育館建設の着手と共に46年間の幕を閉じた。

設計図面の一部が保存されているが⁴⁾、諸資料から判断すると創建時の平面とは食い違いが多いため、入手できた資料によりできるだけ正確な平面の推定復原を行い、さらに計画内容の先進性と設計計画のモデル、および当時の体育界への貢献について考察を行う。

当分野における既往研究は少なく、木下氏による明治以降の体育館の歴史研究⁵⁾において、また山形氏による設計者ヴォーリスの作品研究⁶⁾において、東京YMCA

* 九州産業大学工学部建築学科 教授・工博

Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Kyushu Sangyo Univ., Dr. Eng.

旧体育館の紹介がみえる。本研究はこれらを参考にしつつ、より幅広い資料に基づき、この施設の全貌と果たした役割を詳細に明らかにするものである。

2. 計画立案の経緯

体育館設置の最初の提案者であり、かつ強力な推進者は、当時の東京YMCA総主事・山本邦之助であった⁷⁾。彼は早くから日本のYMCAにおける体育事業の必要を感じていたが、明治40年(1907年)、当時進んだ体育事業を展開していた北米YMCAを巡察し、帰国後次のように主張し、体育館と室内プールの設置を提案した。「アメリカの青年YMCAでは学生の間の運動の奨励は勿論であるけれども、亦他方、重きを一般事業に従事して居る青年及び老人迄も網羅して盛んに室内運動を行って一般体育の隆盛を計っており、此の如き設備が米国の実業家の活動の源泉をなせるものである」⁸⁾

しかし、時機尚早、東京YMCA理事会はこの提案を直ちには受け入れなかった。また、北米YMCAスプリングフィールド体育専門学校で学んだ後帰国し、一時期東京YMCAで体育活動の指導をしていた大森兵蔵も室内体育館の設置を提案したが認められなかった⁹⁾。

山本らの大望が一頓挫したのは、当時の日本の体育の状況と無縁ではなかった。当時は、大正2年(1913年)に文部省より発布された学校体操教授要目にみられるように、明治12年(1879年)創立の体操伝習所¹⁰⁾以来の普通体操に、その後台頭してきた兵式体操を組み合わせた「体操」、それに「教練」と「撃剣・柔術(中学校のみ)」に重きが置かれ、球技などを含む「遊戯」つまりスポーツは軽視されていた。特に「室内遊戯」についてはそうであった¹¹⁾。軍人宰相桂太郎などは、「実戦では、雨雪の中で任務を遂げねばならない以上、風雨に拘らず戸外で鍛練するのが真の教育である」¹²⁾として、雨天体操場不要論さえ唱えるほどのあり様であった。

このような時代的風潮からすれば、いかに進歩的であったYMCAといえども、直ちには体育館の建設に踏み出せなかったのは、むしろ当然のことであった、加えて建設費の問題も大きな障害であった¹³⁾。

このような障害にもかかわらず体育館の建設に向けて始動することになったのは、それまで消極論者であった江原理事長自身が米国視察により北米YMCAの体育事情をつぶさに観察し、その意義を十分に理解し、また北米YMCA有志からの援助金により建設資金の調達が可能になったからである¹⁴⁾。

さらに、名誉主事F. H. ブラウンの貢献も見逃せない。彼は北米YMCA同盟から体育事業の専門家として大正2年(1913年)に日本に派遣され、各地のYMCAで先進的な指導を行った人物であり、従来より東京YMCA本館裏の空地で細々と行われていたバスケットボー

ル、ハレーボール、テニス、体操の指導をより組織的に発展させ、体育館建設への足掛かりをつくった^{15) 16)}。

3. 創建時平面の推定復原

(1) 建物概要

大正6年(1917年)10月の開館式より7ヶ月前の日本YMCA同盟機関誌「開拓者」3月号に、東京YMCA旧体育館の施設内容は次のように紹介されている¹⁷⁾。

「<建坪>百六十五坪カーン式鉄筋コンクリート三階建、階下に幅二十尺長さ六十尺の微温水浴場、ボーリングアレーと見物台、之れにシャワーバス、乾燥室、更衣室、貯蔵室を付属せしめ、二階には幅五十七尺長さ七十七尺の全部オーク張の広大清潔なる運動場にして……(中略)……三階には二十三週にして一マイルに達する円形競技場<ランニングトラック>あり、加うるに四十畳敷の柔剣道場を設け……」(旧漢字仮名遣いは全て現代表記に改めた、<>は筆者補筆)

これにより施設の概略を、またその平面構成は、設計者であるヴォーリズ建築事務所¹⁸⁾に所蔵(現在、大阪芸術大学所蔵)されていた大正3年(1914年)7月1日付のTOKYO.CENTRAL.Y.M.C.A. BUILDING.JAPAN」と銘された設計図面(図2)に知ることができる。これは、コンドルの設計により明治27年(1894年)に開設された東京YMCA既存本館・講堂(図1)を増改築し、加えて体育館を新築するために作成された設計図面である。

しかし、この図面に描かれている平面は、後述する諸資料から判断すると、恐らく施工過程での設計変更によるものと思われるが、実際のものとは少なからぬ食い違いがみられ、創建時の平面とみなすには正確さを欠く。

そこで、当図面を含む関係資料から創建時平面の推定復原を行い、その正確な施設全容を明らかにする。

(2) 推定資料

推定に使用した典拠資料は以下の通りである。

—— 図面資料 ——

- A) 「ジョサイア・コンドル建築図面集Ⅰ」¹⁹⁾中に掲載されている東京YMCA会館の平面図
- B) 「TOKYO.CENTRAL.Y.M.C.A.BUILDING.JAPAN」(東京YMCA既存本館・講堂増築、体育館新築設計図面)、W.M.ヴォーリズ、1914.7(大阪芸術大学所蔵)
- C) 「東京YMCA体育館修増築・暖房工事図面」、テーデンス設備設計事務所、1926.7(東京YMCA英語学校所蔵)
- D) 「東京基督教青年会体育館配置図」、作成時期不詳(大阪芸術大学所蔵)
- E) 「武道場及体育館」、厚生省体力局・体力向上施設参考資料、第5輯、1939.7
- F) 「返還財産引渡調書」(米軍接收財産の返還)、東京調達局不動産部、1955.2(東京YMCA英語学校所蔵)

図1 東京基督教青年会館本館
・講堂平面図

図2 東京基督教青年会館本館・講堂増改築、体育館新築設計図

—— 文献資料 ——

- G) 「開拓者」第12巻第3号, 日本YMCA同盟, 1917.3 (日本YMCA同盟所蔵)
 H) 「TOKYO YMCA 体育館並増築講堂献堂式記念」, 東京YMCA, 1917.10 (日本YMCA同盟所蔵)
 I) 「復興部建築特別委員会議事録」, 日本YMCA同盟, 1926 (日本YMCA同盟所蔵)
 J) 「人格建造奉仕道場としての東京基督教青年会」(体育館増築工事報告), 東京YMCA, 1927.2 (日本YMCA同盟所蔵)

—— 写真資料 ——

- K) 上記G)資料中に掲載された工事中の外観写真
 L) 創建当時の室内写真数葉, 1917.10撮影, (東京YMCA英語学校所蔵)

—— 聴取資料 ——

- M) 東京YMCA英語学校名誉校長・永井三郎氏への聴取および通信調査。同氏は創建直後に東京YMCA会員となり、関東大震災後には復興建築担当主事を務められるなど、創建時と再建時の両者に詳しい。

(3) 平面の推定

1) 推定の手順

まず、創建時平面の推定の基礎とするため、関東大震災再建後の平面図(図3)を、図面資料C、E、Fにより作成した。その際、増築時の図面であるCを主として用い、室名・間仕切の不明箇所をEとFで補った。次に、それを図面資料B(図2)、写真資料K(写真1)、L(写真2)、および文献資料と照合の上、創建時の仮推定図面を作成した。さらに、永井三郎氏による確認と添削を経て、最終的な推定復原平面図(図4)を作成した。

2) 推定経過

i) 建物の全体形状について

資料Jによると、「震災後の修築部分は建坪167.75坪、他に地下室17.6坪(ボイラー室)、増築部分は建坪39.62坪、他に1階建5.3坪(洗濯室)」と建物の規模が記され、また、「<修築部>……大小体育室、体育器具室、ランニングトラック、水泳室、シャワーバス室、ボーリングアリーナ、事務室、医務室、汽缶室、<増築部>……上下更衣室、バスケット預室、ハンドボールコート、会議室、

図3 関東大震災後の体育館復原平面図

日本式浴室、洗濯室」と諸室名が記されている。

この記述から判断すると、修築部すなわち創建部分とみなされる部分は、再建後の平面（図3）中、東側6スパン分に西南隅寄りの回り階段を加えた範囲であると同定できる。このことは、増築部分と考えられる西側2スパン分の柱割りが、縦横方向に乱れが生じていることや、増築による2階事務室の無窓居室化を避けるために付加されたと思われる光庭の設置からも読みとれる。

また、この修築部の「建坪167.25坪」は、文献資料G中、創建建物の竣工7ヶ月前の紹介記事に記された「建坪165坪」とほぼ符合し、その工事中の建物を撮影した添付写真（写真1）も不鮮明ながら推定修築部分の外観を写し出している。さらに、作成時期は不明であるが、恐らく関東大震災後の区画整理時のものと思われる東京YMCA全体配置図（図5）にもこれを裏付ける外形が描かれており、上記の推定は正しいと考えられる。

しかし、これでは大正6年(1917年)10月の開館式に撮影された写真（写真2）に示されている2階建の更衣室

1階平面図

- A 温水プール室
- B ボーリング室
- C 観覧席
- D 更衣室
- E 衣類預室
- F シャワー室
- G ロビー
- H 受付
- I ボイラー室
- J 洗濯室
- K 乾燥室
- L 浴室
- M 便所

中2階

2階平面図

- A 体育室
- B 器具庫
- C 事務室
- D 観覧室
- E 医務室
- F 更衣室
- G 便所
- H 光庭

3階平面図

- A 体育室上部
- B 観覧席兼ランニングトラック
- C 柔剣道場
- D ハンドボール室
- E 倉庫
- F 屋根
- G 水塔

4階平面図

- A 観覧席上部
- B 柔剣道場上部
- C ハンドボール室上部
- D 観覧席
- E 倉庫上部

SCALE 1 M 5 M 10 M

図4 創建時の体育館復原平面図

に該当する部分が前記の修築部には見当たらず矛盾が生じる。永井氏の証言によれば、この更衣室は回り階段の北側に位置していたとのことであり、大正3年(1914年)の原設計図（図2）にも、それと覚しき位置にみられ（ただし2階建ではない）その存在は間違いない。

建坪15坪以上はある2階建ての更衣室が、竣工前の創建建物の面積に含まれず、また関東大震災後の修増築工事報告書からも欠落した原因は、本体工事から大幅に遅れて建設されたため前者の紹介から漏れ、また木造であったため震災で焼失し、後者の報告において修築部からはずされたことによるものと推測できる。確かに、竣工に先立って7月に開場された室内プールの利用規則中に「脱衣場ノ設備完成ノ上ハ……」²⁰⁾とあるように、この時点でも未完成で、10月の献堂式により完成をみたというように、三階建の本体部分からは大幅に遅れて完成したようである。前記の工事中の外観写真に更衣室部分が写っていなかったのもこのような理由による。

施工が遅れた原因は、恐らく講堂の設計変更に関連し

写真2 創建建物竣工時室内写真

写真1 創建建物工事中外観写真

図5 東京基督教青年会館体育館配置図

たものであろう。この講堂は明治27年(1894年)に本館と共に建設されたが(図1)、その後手狭になったため、体育館の新設と同時に増改築されることになった。元の講堂の向きは南北であったが、ヴォーリズの増改築計画によればこれを東西方向に振り、体育館との間は平屋の更衣室部分を介して接続されるよう計画された(図2)。ところが、永井氏の証言でも、実際の増改築後の講堂の向きは南北であったとのことであり、既存の講堂の向きのまま増改築を行うよう設計変更がなされたようである。

また、このような不確定な状況への対応と、講堂と体育館本体に挟まれた窮屈な場所での施工性を考慮し、RC造の本体とは異なり、木造が採用されたようである。

以上の原因により、創建建物の竣工前と関東大震災後の再建時の両時点の文献の記述が、実際の建物形状と食い違いをもって符合することになったと考えられる。

ii) 諸室配置および形状について

内部の諸室について、ヴォーリズの原設計図(図2)と竣工時の室内写真(写真2)とを比較して、明確にその相違点として挙げられるのは以下の点である。

① 温水プール室

原設計では長方形だが、実際には入口方向が台形状に絞られている。ロビーからボーリング場への動線に配慮しつつ、プールの長辺を拡張した結果と推測される²¹⁾。

② シャワールーム

原設計では、ブース(個室)型であるが、オープン型

に変更。多人数利用を考慮したからであろう。シャワールームに連続する乾燥室も設置されていない。

③ ボーリング室

4台のボーリング台が計画されていたが、実際には2台しか設置されず、代わりに観客席が設けられた。

④ 更衣室

当初の平家建の計画から吹き抜けをもつ2階建に拡張されている。利用人数の増加を見込んだ変更であろう。

⑤ ボイラー室

原設計図ではその位置が明確でないが、実際にはプールに隣接した半地階に設置されている。

これらの諸室の復原は主に写真資料に基づいたが、震災後の復興部建築特別委員会議事録(資料I)に記された従前建物からの変更部分についての記述も参考にした。

以上の検討を経て、図4に示す最終的な推定復原平面図を作成した。

4. 計画内容の先進性

復原した創建時の平面図および関係諸資料から、以下のような計画内容の先進的特色をあげることができる。

第1に、施設構成要素が当時としては極めて目新しいこと。バレーボール、バスケットボールなど室内球技が当時としては十分に展開できる広さ(23.8m×17.2m)と高さ(はり下6m)を有する本格的な体育室は、体育専用のものとしては日本のYMCAで最初のもの²²⁾。室内

温水プールは恒久的施設としては我国で最初のもの²³⁾。体育室上部に設けられたランニングトラックも本邦初。ボーリング室は、前年の大正5年(1916年)に京都YMCAと東京帝大YMCAに設置されているので本邦初ではないが、両YMCAと合わせて草分け的存在であった。

第2に、総合性と多目的性。多様な体育室空間・設備が一堂に会され、多種多様なスポーツの展開が可能である。これ以後の室内体育施設がバスケットボールなどの球技施設あるいはその競技観覧施設としての機能を強めていったのとは異なり、この施設は球技はもとより総合的なスポーツ・レクリエーションの場としての機能を有していた。近年、屋内体育施設はトータルなスポーツ・レクリエーションの場を目指すようになってきたが、はやこの時期にその試みが始められていたわけである。

第3に、ブロックプラン、平面計画、構造計画が合理的であること。主要な活動スペースと付属空間部分を平面的に明快にゾーニングし、しかも1階に比較的小規模な室を配置し、その上部に大体育室を乗せ、全体的に極めてコンパクトで構造的にも無理のない構成となっている。また、2階に設けられた主出入口から進入後の利用者と観客との明快な動線分離、および利用者の更衣室から体育室への動線が巧みである。昨今、都市の屋内体育施設は、敷地確保の難しさから、積層型の建物構成が主流になってきているが、この東京YMCA旧体育館は、まさにその先駆的存在である。

5. 設計計画のモデル

計画案の作成にあたって、北米各地のYMCAの体育館が模範とされたことは、体育館建設の推進者であった当時の東京YMCA総主事・山本邦之助をはじめ、東京YMCAおよび日本YMCA同盟関係者が前後数回にわたり渡米視察していることから明白である。また、最初の設計図が完成する大正3年(1914年)の前年に、設計者であるW. M. ヴォーリズが一時帰米しており²⁴⁾、体育館設計の細部にわたって、北米YMCAの体育館がモデルにされたことは疑いようがない。

ところで、北米YMCAの会館建築は、1869年(明治2年)頃までは、シカゴ型といわれる大講堂中心の会館が主流であったが、それ以後はニューヨーク型と称する体育館を中心とする形式が普及し、さらに室内水泳プールが加えられ、東京YMCA体育館建設の計画が持ち上がった明治末期には、このような施設形式が普遍化していた。

写真3は、1908年(明治41年)に開館したオハイオ州デートン市YMCAの体育館であり、東京YMCA旧体育館の設計が進行していた時期の明治44年(1911年)8月に日本YMCA同盟の広報誌「基督教青年会一覧」²⁵⁾に紹介された当時の最新情報である。内部形状は東京YMCAに酷似している。また写真下部の記述によれば、

写真3 米国オハイオ州デートン市YMCA会館体育館

写真4 米国ワシントンD.C. YMCA会館室内プール

体育室の規模は64ft×90ft(約165坪)であり、東京YMCA体育館の規模(建坪でかつ付属の諸室を含むが)と合致する。同じく、室内プールの規模は20ft×60ftとあり、これまた東京YMCAのプールと全く同一である。さらに、1912年(大正元年)に米国からヴォーリズ建築事務所の所員として来日し、ヴォーリズの片腕として働いたJ. H. ヴォーゲルの出身大学がオハイオ州立大学でもあり²⁶⁾、このデートンYMCAの体育館が東京YMCAを計画する際の直接のモデルとされた可能性が強い。

写真4も同じ文献で紹介されたワシントンYMCA(1905年、明治38年開館)の室内プールである。規模は東京YMCAのそれとはほぼ同じ程度で、プール脇にあるブース型のシャワーも東京YMCAの最初の計画と同様の形式であり、これも計画の参考にされたようである。

しかし、このような特定の体育館が計画モデルにされたというより、当時、米国各地のYMCAに普及していた体育館の標準例を模範にしたと解釈した方が正確であろう。この点、当時の米国YMCA体育館の現地調査を行っているので、別稿で詳細に考察する予定である。

6. 体育界への貢献

東京YMCA旧体育館が当時の体育界に及ぼした貢献は枚挙にいとまがない。

まず活動状況であるが、東京YMCA体育部は会員制の個人利用が原則であり、ディレクター(主事)の指導による自主事業を展開した。当時の利用予定表²⁷⁾によると、少年部、青年部、会社員、商店員など各層に分けてスケジュールを組み、平日の夜間に開放されていた。

戦後の公共体育館が長らく貸館主義と大会主義に偏る傾向があり、最近になってようやくプログラムサービスによりスポーツ愛好者の育成に努めるようになったが、東京YMCAでは当初よりこのスタイルをとっていた。

当時、ある一人の会員が東京YMCAの機関誌に記事を投稿し、下記のように述べているが、当時の体育部の状況と効果の一端がうかがえて興味深い。

「東京基督教青年会のジムナジウムほど設備の完備充実したものは現時恐く他にあるまい。しかも帝都の中央、至便の巷にかゝる立派な施設が僅かの会費を徴して公開して居ることを知らば之を利用せぬ人こそ誠に馬鹿だとも云ひ得るであろう。…(中略)… 僕が今度同館に入会した最も手近い目的を告白せば僕が『食事をおいしく且つ沢山に頂けること』と夜分に『前後も知らず強烈なる睡眠を取る』この二つに外ならぬ……」²⁸⁾

また、室内プールにおいては、大正6年(1917年)の開場後まもなく、「事前の体格検査」「シャワーによる洗浄」「長時間水浴の禁止」「水着の消毒」など衛生保持を骨子とする厳しい使用規則が定められた²⁹⁾。このような厳しい規則が定められた背景には当時の国民の保健・衛生状態の悪さがあった。上記の体格検査によれば、皮膚疾患、性病、伝染病などによる不合格者が約60%を占めたとのことである。それだけにこのような検査を経ての供用は保健・衛生意識を高める上で大きな意義があった。

さらに、日本水上競技連盟史によると、「大正9年(1920年)に改訂された東京基督教青年会水泳競技会規則を左に採録して置く。此規則は当時最も進歩した規則として斯界に認められたものである。」³⁰⁾、また「ここで話と読書によってクロールの練習がおこなわれた。一高水泳部の連中を中心とするもので、(中略)ダニエルの著書を研究して、新水泳法による競技の合同練習が初まったのである。」³¹⁾とされており、日本の近代水泳の黎明期において水泳界に対して多大な貢献をしている。

一方、球技については、全日本選手権大会および極東選手権大会国内予選会をはじめ、大正後期から昭和初期にかけて、バスケットボールの会場として再々使用されている。また、ここで練習を重ねた東京YMCAのバスケットボールチームは、大正10年(1921年)から始まった全日本選手権大会に三連覇を果たしているが³²⁾、その後のバスケットボールの普及に果たした役割は大きい。

このような競技面での貢献に留まらず、東京YMCA体育部は、大日本体育協会および東京高等師範学校の協力を得て、大正10年(1921年)および翌年の2回にわたり「体育指導講習会」を開催し、当時まだわずかしかなかった社会体育の指導者の養成に一役買っている³³⁾。

7. その後の体育館計画への継承を阻んだ制約条件

以上のように、東京YMCA旧体育館が当時の市民層や体育界に成した貢献は多大であった。しかし、このような画期的な特質も、その後の我が国の体育館計画や運営方法に必ずしも継承されてはいかなかった。当時の社会的・経済的条件がそれを許さなかったからであろう。

大正末期以降のスポーツは競技主体のものに傾斜していった。過度の競技化に危惧の念をもっていた文部省でさえ、社会体育の振興は競技会を頂点とするピラミッド構造によって実現できると考えていたふしがある³⁴⁾。また、戦時色が深まった昭和初期には、国威発揚のために列国に劣らない選手を養成することが主眼となり、兵力増強の観点から国民体力が問題にされることはあっても、市民の日常的なスポーツの促進は軽視されていた。国家経済の面から比較的費用のかからない屋外スポーツを奨励せざるを得なかったことも一因である。

この構造は、戦後も基本的には変わることがなく、我が国のスポーツは久しく学校スポーツ、企業スポーツを中心とする選手スポーツによって担われてきた。それが、昭和40年代後半以降、余暇時間の増大にも伴い、次第に市民のスポーツ・レクリエーション要求は高まり、ようやく東京YMCA旧体育館のような市民向けの屋内体育施設が再評価される段階に至ったといえよう。

8. まとめ

我国最初の社会用の総合体育館である東京YMCA旧体育館の施設全容とその画期的意義を明らかにした。

まず、残されている原設計図は、施工時の大幅な設計変更のため創建時の平面を正確に表していないので、各種の資料により、創建時の推定復原平面図を作成した。

次に、復原平面図と諸文献資料により次のような施設の先進的な特色を明らかにした。

- 1) 前報でも述べたように、大体育室、室内温水プール、ランニングトラック、ボーリング室などの施設要素が我国最初、あるいはそれに準ずるものであること。
- 2) また、室内球技をはじめ多種多様な種目を行うことができ、市民の「総合的なスポーツレクリエーションの場」としての機能を有していたこと。
- 3) 主空間と付属空間、小規模な室と大規模な室などのゾーニング、および選手と観客の動線が明快で、構造的にも無理がなくコンパクトにまとめられており、市街地における積層型体育館の原点的存在であること。
- 4) 運営面は、会員制でディレクターの指導による個人利用が原則であり、市民性に即応した方式がとられており、近年その普及が課題になっているスポーツクラブ型の運営方式の先駆け的存在であったこと。

このような先進性をもつ東京YMCA旧体育館は、オハイオ州デートン市を始め当時の北米YMCAの体育館をモデルに計画された。これについては別稿で詳述する。

また、当時の体育界に及ぼした貢献は特筆に値する。市民各層への近代スポーツの普及、プールにおける保健・衛生面を重視した利用規則および整った水泳競技規則の制定、新水泳法の研究の場、全国レベルの室内球技大会への会場の提供、社会体育指導者の養成などである。

謝 辞

資料収集にあたっては、星野達雄氏、永井三郎氏、落合則男氏を始めとするYMCA関係者、木下秀明日本大学教授、水谷豊桐朋学園大学教授、山形政昭大阪芸術大学助教授の方々にご協力を賜った。ここに記して感謝の意を表します。

注・引用文献

- 1) 上和田茂：戦前のYMCA体育室における計画概念と形態に関する史的考察，社会用体育館に関する建築計画史的研究その1 日本建築学会計画系論文報告集，第379号，pp.63～73，1987
- 2) これ以前にも屋内体操場としては明治12年開設の文部省体操伝習所を嚆矢として、いわゆる学校の雨天体操場が数多く設置されている。「能勢修一：明治体育史の研究，遺通書院，1965」また明治3年神戸の外国人居留地に設けられたKRAC (Kobe Regatta & Athletic Club)に体育館が建設されたといわれるが、その用途は劇場かダンスホールに近いものであった。「棚田真輔：神戸スポーツ草創史，道和書院，pp.23～24，1978」仮設のものでは、東京勸業博覧会（明治40年）に展示された体育館があり、これが我国で「体育館」と最初に呼ばれたものである。「木下秀明：日本大学八十年史，学校法人日本体育会，pp.458～462，1973」、「日本体育会機関誌「體育」第161号口絵，1907」，「東京市役所市史編さん係編：東京勸業博覧会案内，1907」
- 3) 前掲引用文献1) 参照
- 4) 「TOKYO, CENTRAL, Y. M. C. A. BUILDING, JAPAN」(東京YMCA既存本館講堂増改築。体育館新築設計図面)，W. M. ヴォーリス建築事務所，1914.7 (大阪芸術大学所蔵)
- 5) 木下秀明：近代日本における体育館の歴史，日本大学人文科学研究部研究紀要，第22号，pp.71～94，1979.3
- 6) 山形政昭：ウィリアム・メレル・ヴォーリズの建築をめぐる研究，私家版（学位論文），1993.2
- 7) 斎藤実：東京キリスト教青年会百年史，東京キリスト教青年会 p.137，1980
- 8) 大日本体育協会編：大日本体育協会史，上巻，p.436，1937
- 9) 奈良常五郎：日本YMCA史，日本YMCA同盟出版部，pp.205～206，1959
- 10) 米国からのお雇い外人体育教師リーランドの指導により設置された施設。詳しくは次の文献を参照のこと。「能勢修一：体操伝習所体育館の考察，鳥取大学学芸学部研究報告。教育科学，第4巻，1962」，「今村嘉雄：学校体育の父。リーランド博士不昧堂出版，1968」
- 11) 竹之下休蔵。岸野雄三：近代日本学校体育史，日本図書センター，pp.109～111，1983
- 12) 前掲引用文献11) p.93
- 13) 山本は当時を振り返って次のように述懐している。江原理事長の如きすら、日本は徴兵法により青年の身体は鍛練せられると言ひ、ドクトル川上昌保理事は運動は室内にては不可なり、宜しく郊外の原野たとえば荒川放水路の如き場所に休日を利用しバスにて交通すべしと、斯くの如く異論百出、折角、主事が洋行調査をなした結果の献策もそのまま葬り去らるることになった。「山本邦之助：禿翁百話，新々堂，pp.133～134，1951」
- 14) 12ヶ国60ヶ所への建設援助金の一部で日本への割当は50万円、そのうち9万円が東京YMCA増改築資金に充てられた。「前掲引用文献7) pp.145～146」
- 15) 前掲引用文献9) pp.208～207
- 16) 東京基督教青年会：ANNUAL REPORT 1914
- 17) 日本YMCA同盟：開拓者，第12巻第3号，1917.3
- 18) 当初ヴォーリス合名会社と称した。設立者のW.M. ヴォーリスはキリスト教の伝道のため1905年来日、その後日本におけるミッション系の建築の設計を多数手掛けた。「前掲引用文献6)」
- 19) 河東義之編：ジョサイア・コンドル建築図面集Ⅰ，中央公論美術出版，1980
- 20) 前掲引用文献7) p.148
- 21) 震災後の増築時に台形状から一回り大きな長方形に改造された。プール溜の長辺をそれまでの20ヤード(18.28m)から当時のプールの標準長さである20mに再び拡張したことによる。これによりボーリング室への通路幅は狭められることになった。
- 22) 前掲引用文献1) pp.66～68
- 23) 仮設のものでは、これ以前の明治40年に開催された東京勸業博覧会場に体育館と共に設けられた屋内プールがあり、室内游泳場と呼ばれた。「前掲引用文献2)」
- 24) 一柳米来留(W. M. ヴォーリス)：失敗者の自叙伝，近江兄弟社湖声社，1970
- 25) 日本YMCA同盟：基督教青年会一覽，1911.8
- 26) 前掲引用文献6) p.32
- 27) 東京YMCA：東京青年，第306号，1927.7
- 28) 東京YMCA：東京青年，第310号，1927.11
- 29) ① 青年会員ニシテ体育部ニ入ラントスルモノハ体格検査ヲウケベシ。
② 脱衣場ノ設備完成ノ上ハ維持会員ニ対シ一人毎ニ其ノ所有品ヲ納メ置クベキ籠一個ツツテ貸渡スベシ。
③ 水泳ヲナサントスル者ハ必ズ石鹼ヲ用ヒ「シャワーバス」ニテ身体全部ヲ充分ニ洗浄シタル上水溜ニ入ルベシ。
④ 温浴ハ五分間ヲ以テ充分ナリトス。水泳後ハ温浴ヲ取ル必要ナシ。
⑤ 水泳ハ健康ヲ増進スル益アルハ勿論ナリト雖モ長時間続ケテ水中ニナルハ却ツテ害アリ。通常ノ人ニアリテハ三十分乃至四十分以上ニ至ラザルヲ宜シトス。
⑥ 水泳場ニ於テハ襪ヲ使用セザルヲ原則トス。但シ「シャワー・バス」使用中ノ他ハ希望ニヨリテハ本会備ヘ付ノ消毒済ノモノニ限り使用ヲ許ス。「前掲引用文献7) p.148」
- 30) 大日本体育協会編：大日本体育協会史，下編，p.1945，1937
- 31) 日本体育協会編：日本スポーツ百年，p.210，1971
- 32) 前掲引用文献8) pp.445～446
- 33) 日本YMCA同盟：同盟事業報告。自大正9年至大正11年6月
- 34) 厚生省体力局編：武道場及体育館，体力向上施設参考資料第5編，p.60，1939.7

参考文献

- 1) 木本茂三郎：YMCA史ノート，YMCA出版，1983
- 2) 山本邦之助：南十字を望みて，新教材社，1949
- 3) 星野達雄：YMCA人間抄史(16)体育指導半世紀の柳田亨，別冊東京青年，No.174，東京キリスト教青年会，1984.5
- 4) W.M. Vories & Company Architect: Their Work in Japan 1908～1936，城南書院，1937
- 5) 今村嘉雄：日本体育史，不昧堂出版，1970
- 6) 岸野雄三他：近代体育スポーツ年表，大修館，1973
- 7) 今村嘉雄。岸野雄三：図説世界体育史，新思潮社，1964
- 8) 小田切毅一：アメリカにおける先駆的スポーツ教育，体育・スポーツ人物思想史所収，不昧堂出版，1979
- 9) 石川悦子：近代的女性体育論の提唱者，近代日本女性体育史所収，日本体育社，1981
- 10) 日本体育学会体育史専門分科会編：日本スポーツ百年の歩み，ベースボール・マガジン社，1967
- 11) 江橋慎四郎：現代レクリエーション百科，ぎょうせい，1977
- 12) 教育史編纂会：明治以降教育制度発達史，教育資料研究社，1938
- 13) 文部省編：学制百年史，帝国地方行政学会，1972
- 14) 青木正夫：建築計画学8「学校Ⅰ」，丸善，1976
- 15) 栗山幸三編：体育施設全書第2巻「学校体育施設」，第一法規1970
- 16) 菅野誠・佐藤譲：日本の学校建築，文教ニュース社，1983

(1994年5月10日原稿受理，1994年10月3日採用決定)